

## 間宮林蔵は善人か悪人か—歴史は後世に脚色される—

高尾 隆

間宮林蔵は間宮海峡を発見した世界的な探検家とシーボルト事件や西南諸藩の密貿易事件に暗躍した幕府の隠密という二つのレッテルがある。日本人が好むシーボルトを国外追放という結果だけで、なぜこの全く相反するような人間像のまま歴史に存在するのかその真実に迫ってみたいと思う。

### ■林蔵のイメージ…人間像

#### [性格]

- 短所 ・直情的である ・協調性が薄い  
・出世欲が薄い ・権威に弱い ・処世術が下手
- 長所 ・探求心がある ・自己顕示欲強い  
・粘り強い ・職務に忠実 ・信念を曲げない

#### [行動]

・個を好み、一人でコツコツとやり遂げるまでやめない持続力がある。自分の価値観に合う人には徹底的に尽くすが、おもねるようなことはしない。

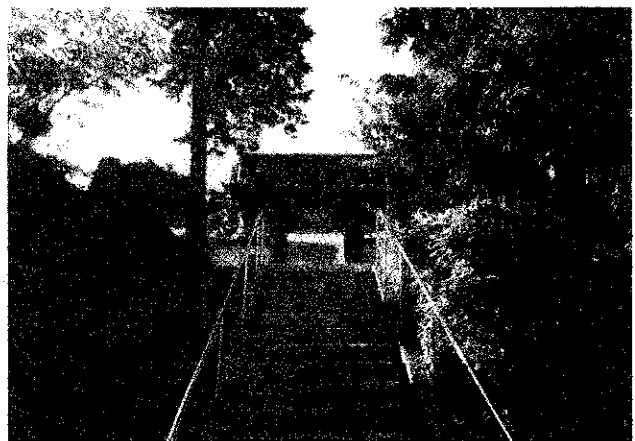


松岡映丘が描いた林蔵の肖像

### 1. 横浜間宮氏につながると思われる林蔵の出自

出身地・常陸国筑波郡上平柳村 小貝川のほとりの農民、間宮家長男として安永9年(1780)生まれる。間宮家といえば横浜を拠点に後北条家に仕え、その後徳川の旗本として家名を残した横浜間宮家が知られる。そのルーツがなぜ筑波の農家の子間宮林蔵につながるのか?そのヒントとなるのが江戸の初期(寛永年間~)利根川東遷事業の一環として行われた小貝川の開発にあったことが考えられる。当地上平柳村は現在のつくばみらい市になるまでは筑波郡伊奈町にあった。この伊奈町の伊奈とは、家康が江戸の開拓を始めるに至り、その普請を任せたのが関東代官伊奈氏の名前だ。徳川の関東転封と同時に初代・伊奈忠次が検地・開拓を手掛けたのが久良岐郡(今の横浜、西区・磯子区・金沢区・港南区など)だった。

室町時代からこの辺りを治めていた間宮家の中心的な城が港南区笹下にあり、北条の有力武将と



横浜市港南区笹下の成就院。寺周りの高台は間宮信元が築いた笹下城があった。笹下は佐々木氏に由来する。

して秀吉の小田原征伐の際、山中城で敵と死闘を繰り広げた間宮康俊はこの笹下城城主だった。北条滅亡後、徳川治世になっても間宮家は一帯の代官として治めることができた。康俊には幾人かの男子がおり、大半が各所の代官・旗本などとして存続したのだが、末子に番匠隼人\*という庶子がおり、これが筑波に移り住んだのではないかとされている。

\* 番匠は姓ではなく、身分を表しており、元々は  
大工のことで、転じて広く土木工事などを行うこ  
とも含んでいる。

\* 林蔵の生家にはルーツとして隼人の名が残され  
ていたが、横浜との関りは何も残されていなかった。

上平柳間宮家には隼人の「慶安元年子十一月  
九日」の位牌が存在する。しかし間宮一族会の研  
究者・間宮富士雄氏が『番匠隼人について』と題  
する小論を出し、横浜市域の古い検地帳に隼人な  
る人物が記載されていると記述している。隼人は  
伊奈忠次にかかわり、後の伊奈忠治の相馬・谷原  
の開拓に伴う、鬼怒川・小貝川の分離の掘削工事  
に従事するつながりを持ったのではと考えられる。

## 2. 林蔵が世に出るきっかけとなった事

隼人からは150年を経過した頃、上平柳のそば  
を流れる小貝川は暴れ川として知られ、その治水  
整備は常態化していた。ある時その工事において、  
大人顔負けの提言をする16歳の林蔵がいた。

その才覚※が役人の目に留まり、蝦夷警備の強  
化を図るため調査に指名されていた幕臣村上島  
之丞から測量などの技術を学び、「蝦夷地御用御  
雇」に登用され、蝦夷へ同行することになる。

※幼少から伶俐で数学的才能に優れていたと伝  
えられる。

寛政12年(1800)蝦夷では国後、択捉へ渡り、測  
量や作道などに従事する。この時函館で出会った  
のが「第一次測量」に来ていた伊能忠敬で、弟子  
入りをしたとされている。忠敬55歳、林蔵21歳。

### 【林蔵が来るまでの蝦夷の出来事】

1789年メシナの戦い…国後島メシナで和人の横暴

にアイヌが蜂起(アイヌ対和人最後の戦い)

1792年大黒屋光太夫ラクスマンに伴われ帰国。通  
商貿易求められる。

1798年最上徳内、近藤重蔵が択捉島を探検、「大日  
本恵土呂府」の標柱を立てる。

1799年遠山景晋が東蝦夷を松前藩から幕府直轄  
地に。勘定奉行石川忠房、目付羽太正義

## 3. 林蔵の世界観、生き様を変えた事件

### 「レザノフ襲撃事件(フポストフ事件)」

文化元年(1804)露商人レザノフはラクスマンが  
持ち帰った信牌を携え通商を求め、長崎を訪れるも  
何も得られず、怒って日本の蝦夷領域の攻撃を決  
断する。幕府のこの冷たい対応を杉田玄白や司馬  
江漢らが批判した。

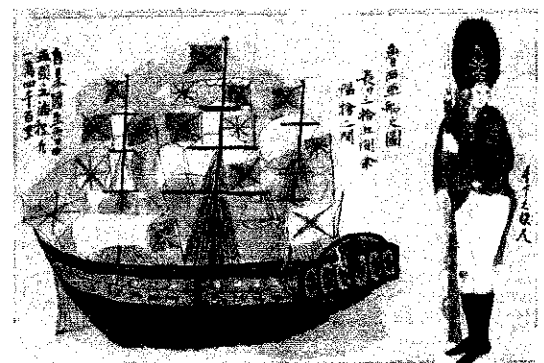
文化3年9月(1806)に樺太クシユンコタンを襲い、  
(文化露寇)次いで文化4年4月(1807)に択捉島を  
襲撃する。(択捉島事件)

仕事で択捉島にいた間宮林蔵は迎撃を主張す  
るも、結果的には何の抵抗もできなかった。

当時択捉には日本の会所があり、幕府の松前奉  
行の下、津軽・南部藩からの藩兵が配属されており  
ロシアの上陸に対応する兵力はあったのだが、会  
所に火をつけ撤退するという失態を犯してしまった。  
後に幕府がこの対処について林蔵を含め関係者  
全員を詮議した。

※林蔵が撤退しようとする会所の奉行役人に「私  
は退却の相談を聞いていなかった、という証文を  
書いてくれ」と主張したエピソードが残っている。

この年の暮れ、幕府はロシア船打払い令を出し、  
蝦夷北方を脅威の対象としてとらえるようになる。  
そうした中、林蔵は詳しい地図作成を含め樺太一  
帯の調査が必要であると、その踏査を願い出る。



#### 4. 林蔵、カラフト調査へ

1808年幕府天文方の高橋景保が、松田伝十郎・間宮林蔵を樺太の調査に派遣する。伝十郎は林蔵より10歳ほど年上、越後の貧農の出で道普請をしていた幕臣に認められ士分に取り上げられた。林蔵同様の身であった。

当初、カラフト南端(白主)から伝十郎が西回り、林蔵が東回りで出発する。東回りは遡上が厳しく林蔵は途中から西海岸に移り北を目指した。先に進んでいた松田伝十郎が海峡最狭部(ラッカ)に達し、海峡であることを確認した。翌1809年、間宮林蔵は最北部ナニヤーへ到達し海峡を確認。さらに現地人の船で海峡を越えて大陸に渡り、韃靼にある清国役所があるデレンを訪れるなど、この地域の詳細な調査をする。

文化7年(1810)蝦夷に戻った林蔵は『北夷分界余話(ほくいぶんかいよわ)』と『東韃地方紀行(とうだつちほうきこう)』を書き、樺太地図「北蝦夷島地図」を作成する。

\*著書は村上島之丞の養子村上貞助の口述

#### 5. 伊能忠敬と再会、緯度測定法を学ぶ

文化8年(1811)江戸へ戻った林蔵は松前奉行支配調役下役格に昇進、蝦夷地の地図作りが任務となる。またこの年九州の測量から帰っていた忠敬に再会し、緯度測定法を本格的に学ぶ。12月蝦夷地へ向かう。翌年松前に行き、国後で捕らえられ監禁されていたゴローニンと面会し、尋問を行う。\*ゴローニンはロシアに拘束されていた高田屋嘉兵衛とディアナ号副艦長リカルドとの友好的な話し合いにより無事解放される。これを境にロシアからの不法行為は幕末までなくなる。

\*ゴローニンが後日著した『日本幽囚記』には林蔵との人となりなどが述べられている。

文化11年(1814)蝦夷地の測量を始める。

\*忠敬ができなかった西蝦夷(北側半分のこと)の測量及びその後行った蝦夷の河川を踏まえた内陸部の調査は忠敬も驚くほどの出来栄であった。

文化14年(1817)父親を弔う。15年忠敬死去。

文政5年(1822)幕府の蝦夷地直轄をはずし、松前藩を旧領に戻す。蝦夷地の測量を中断、江戸で勘定奉行(村垣定行)の配下になり、普請役となる。

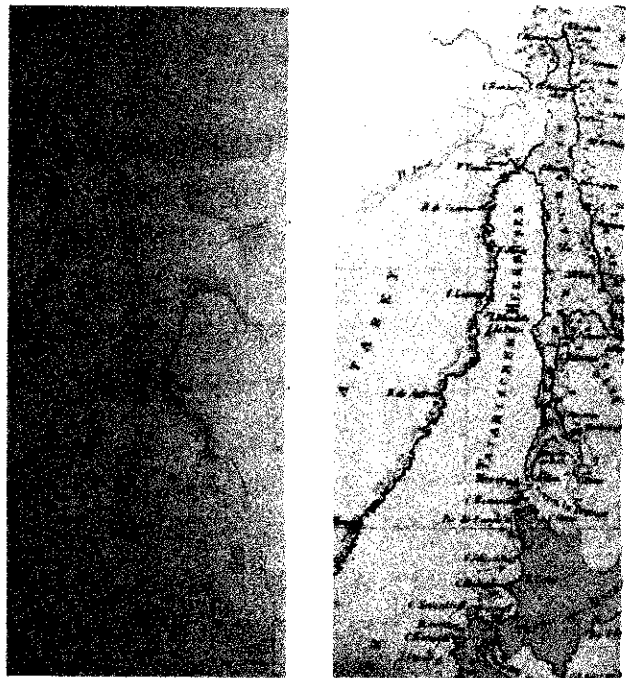
文政7年(1824)イギリス捕鯨船による大津浜事件、宝島事件がおきる。林蔵は房総をはじめ東北沿岸の外国船風聞調査を行う。この年、母を弔う

#### 6. シーボルト事件発覚のきっかけ林蔵への小包

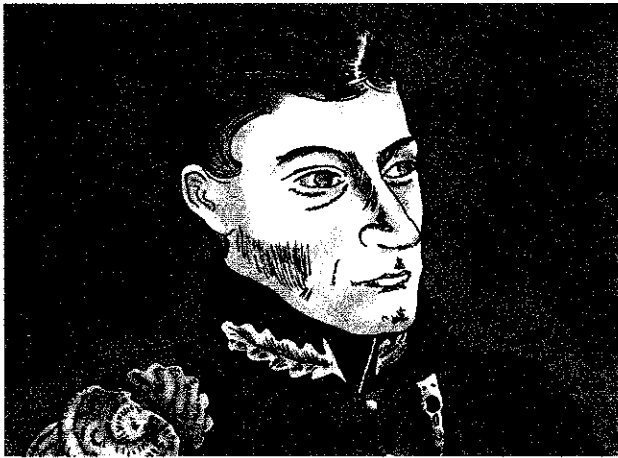
文政9年(1826)3年前オランダ商館付き医師として着任していたシーボルトが商館長スチュルレルの参府に伴い江戸を来訪、天文方書物奉行高橋景保と会う。

親交を得た高橋景保はシーボルトが所有するクルーゼンシュテルンの『世界周航記』※を手に入れるのと交換に、伊能忠敬の『大日本沿海輿地全図』や林蔵の測量を加えて完成した南千島、カラフトが描かれた蝦夷図などを与えることを約す。シーボルトからの交換品は翌文政10年6月景保へ届けられた。

同じ頃、林蔵も最上徳内と共に江戸でシーボルトに会っている。



露海軍提督クルーゼンシュテルンは1803~06年に世界就航を行い途中レザノフを送り長崎へ来航。その後蝦夷・千島を測量、樺太も行うが離島であることを確認できなかった(右)。(左)林蔵の地図は未熟ではあるが海峡を明示。



文政10年(1827)代官柑本兵五郎に従い伊豆諸島の見分に赴く。

文政11年(1828)シーボルトからの小包を受け取るが開封せずに勘定奉行に提出。その中身は進物の更紗と林蔵のカラフト探索を称賛し、蝦夷産草木の押し葉を譲ってほしいというものだった。このことから景保が外国人とひそかに通信していることが判り内偵が始まった。この全容はシーボルトが帰国に際し膨大な日本の調査で得た資料を乗せた船が出航間際に長崎港で台風に遭い破損し、持ち出し禁制の品々が白日にさらされた。

シーボルトは逮捕、高橋景保はじめ関係者も芋づる式に逮捕され、景保は翌年2月獄死する。シーボルトは長い詮議の後、国外退去となり帰国する。文政12年(1829)隠密として長崎へ

## 7.幕府の密命で西日本の隠密(見分)活動へ

天保4年(1833)9月諸国見分から戻り、天保の飢饉に苦しむ農民を目の当りにして「田畑を転作することをやめるよう」勘定奉行に建議する。この年12月足高20俵を支給される。

天保5年(1834)水戸家へ出入りし斉昭・藤田東湖と会うようになる。

天保6年(1835)11月、川路聖謨※の配下、勘定吟味役となる。(～天保9年11月)

※川路は佐藤一斎に師事し、水戸藩の藤田東湖、砲術家の江川英竜、渡辺崋山、佐久間象山らと交わり、西洋への関心を深める。林蔵はこの交友関係の中にいた。川路の日記に「渡辺登や林蔵が何度も訪ねてきて激しく議論を戦わせた」とある。



日田代官官吏の息子で苦勞して幕臣となる。露ブチャーチンとの長崎交渉等、幕末日本の外交官として功績を上げる年下の林蔵を親愛し幕僚として接し「先生」と呼んでいる。この時、川路35歳、林蔵56歳。

天保7年(1836)山陰道を巡視している時、石見国浜田で密貿易摘発の端緒をつかむ。江戸へ戻る折に、大坂町奉行矢部定謙に報告、矢部は石見に密偵を派遣し、「竹島事件」が発覚する。浜田の廻船問屋 会津屋八右衛門が竹島で密貿易を行っていることが判り、藩の重臣二人が切腹、藩主が永蟄居となった。

天保9年(1838)この頃深川蛤町 30俵3人扶持、年金10両に足高20俵の手当てを受ける生活。江戸で病の床につく

天保15年(1844)2月26日没す



伊奈間宮家に伝わる林蔵が探検に用いた防寒頭巾



林蔵が用いた測量用の鎖

明治以降、間宮林蔵に関する文献は、歴史物の冊子の中の短文で紹介されているのがいくつか見られる。中でも『少年読本』の一つに「間宮倫宗」が著され、厳しい探検の偉業の果てに隠密の後世を歩んだことを惜しむ内容になっている。このような林蔵の存在が注目されるきっかけは明治30年頃、日露戦争の勃発があると考えられる。

一方、シーボルトは明治の初期にはその存在は一般にまったく知られておらず、明治29年(1896)、日本の西洋医学者有志がシーボルト生誕100年記

念を催し、「シーボルト」の小冊子をつくった。日本の近代医学がドイツ系であり、シーボルトがドイツ人であったことが背景にある。

その後林蔵をテーマとして取り上げ始めるのが、昭和10年代のプロレタリア文学や演劇であった。すなわち世界大戦へ傾倒する暗黒の時代への流れの中で、芸術が自由を失われることの風刺として、幕府という権力=帝国日本、隠密林蔵=特高警察という図式に例えた物だった。シーボルトはコミンテルンのメタファーとして利用されたのだ。

### 検証

## 間違っって作り上げられた林蔵の人間像を正す

戦後、林蔵を詳しく扱った研究書籍が出された。昭和35年新書 洞富雄著『人物叢書-間宮林蔵』日本歴史学会編集 吉川弘文館である。

実はこの本の記述が今日伝えられる間宮林蔵像を確立してしまった。

著者洞富雄氏は早稲田大学文学部史学科を卒業し、大学附属図書館の書記を経て戦後、同大の教授を勤め、1977年退職している。「鉄砲伝来記」や「種子島銃 伝来とその影響」など歴史学者として知られた。

しかし「間宮林蔵」における記述に林蔵と郷里を同じくする赤羽栄一氏が自書※に著すとともに反論した。しかし前者の存在が大きく今日まで林蔵像は洞氏観で固定されている。

※昭和49年新書 赤羽栄一著『間宮林蔵』清水書院

ところが小谷野敦氏が1998年に著した『間宮林蔵隠密説の虚実』教育出版社がその林蔵の見方を変える一石を投じた。そこから見える洞氏が作り上げたイメージの問題点を取り上げ、私の考えとして述べたいと思う。

洞富雄著『間宮林蔵』の本文より抜粋

### 1. 事実誤認と思える記述と主観的表現

1. 進歩派の人々は、おそらくすべてが林蔵を白眼視したであろうし、これまで親しくしていた知名人、畏敬の念を抱いて仰ぎ近づいていた若い人たちも、あるいは去り、敬遠し、林蔵の周囲は急にものに寂寥たるものになってしまったようである。
2. 日本で集めた膨大な貴重資料を携えて、帰国の途につこうとしていたその時、林蔵の密訴によって、景保の秘密が発覚した。
3. これが世にいうシーボルト事件である。この事件は当時の学会を震撼させ、新しい学問の発展と日蘭交流に重大な打撃を与えた。
4. 密告屋として功績を上げながらも幕府の評価は低いものでした。
5. 江戸蛤町で寂しい晩年を送りました。  
\*時折蝦夷への興味を抱くお殿様たちの江戸藩邸へ赴き馳走をいただき、話を聞かせた。
6. 幕府は「愚忠の人」林蔵を終世隠密として用いただけで、これに地位を与えて優遇しようとはしなかった。

7. 過去にあれほどの功績を立てた人物をわずかな増棒を、一回与えただけで、犬と呼んで人の嫌う隠密に終始させて、昇進の道を開いてやらなかった幕府の処置には不審が感ぜられる。

## II. 感情的な思い入れで林蔵の行為を評価

1. (高橋景保に対して) 公儀に不忠な者は生かしておけぬという偏忠・愚忠な男(と断定)

2. シーボルトからの荷物を開封もせずに幕府へ提出。シーボルトからのものは何か疑わしいものがあるのではと思い…。

3. 林蔵はシーボルトの小包を奉行所に届ければ、当然、当局の嫌疑が景保にかかることを意識していたとみてよい。したがって、事件の発展の結果から見れば、密告者と考えられても已む得ないわけである。

## III. 時代錯誤とも思える作家の主張

1. ひとりは洋学研究、ひとりは日本研究、学問を愛する以外に他意はなかったこの尊敬すべき二人の学者はしばしば会ってお互いに知識の交換を行った。(文政9年1826年)

2. 航海記を得てカラフトの地理を明確にすることができたならば、この方(高橋景保)がどれだけ我が国の学術に貢献し、かつカラフト経営の実際に役立つかもしれないと考えたことであろう。むしろ景保の心事からすれば、国を愛したればこそ、命を懸けての冒険(取引)をあえてしたものに相違いない。

3. 高橋景保・間宮林蔵・最上徳内・シーボルトの四人をめぐる1世紀前の国際学界奇談は、今日なお、我々学問の道に携わるものの胸奥に強く訴えるものをもっている。

## ■参考文献

- ・利根川文化研究会 利根川文化研究18より 大谷恒彦 著  
『間宮林蔵の祖「番匠・隼人」は伊那郡代の小貝川流域開発に協力』
- ・グラフ・ヨコハマ第21号(1977.5) 特集・系譜のナゾ『玄白と林蔵の因縁』
- ・洞富雄 著『間宮林蔵』人物叢書 吉川弘文館
- ・赤羽栄一著 『間宮林蔵』 清水書院
- ・小谷野 敦 著 『間宮林蔵<隠密説>の虚実』
- ・吉村 昭著 小説『間宮林蔵』講談社



◆間宮家のルーツ

戦国期～江戸初期～18世紀末(林蔵生誕地)

④秀吉の小田原討伐の際、間宮康俊は山中城防衛に参戦、白髪を懸て突め敵陣へ突撃、壮絶な最後を遂げる。\*康俊の墓は山中城跡にある。その後の娘・お久は家康の側室、一族は幕府の旗本として取立てられる。

間宮姓のルーツ

田方郡函南町間宮。平安末期から見られる荘園名三島と葦山の間に八幡宮があったことに由来する説あり

北条氏貞城  
北条氏康城  
北条氏朝城  
玉縄城  
宗三寺  
①  
×権現山の戦い②  
●杉田陣屋  
⑥笹下城

③信冬の子 間宮信盛の頃に北条の家老格として玉縄城傘下笹下城に移る。以降は信元-康俊(玉縄城主-北条綱成与力)。\*「笹下」の地名は本名 佐々木から転訛したとの伝承。

江戸時代、杉田間宮家が代官として当地を治める。杉田玄白の杉田家は間宮家の分流か親族与力。間宮氏の墓-杉田・妙法寺。

平柳村 ●

常陸国筑波郡上平柳村

⑤慶長年間または寛永年間に康俊の子(?) 間宮隼人が帰農して移り住む。

間宮林蔵 安永9年(1780)生まれ。少年時代、生家近くを流れる小貝川の堰止め工事に加わった林蔵の非凡な才能が幕府役人の目にとまり、幕臣村上島之丞に付き下役人となる。

川崎市砂子 宗三寺境内  
間宮信冬の館

①近江源氏佐々木氏の流れをくむ者が南北朝時代に伊豆国田方郡間宮村に移り住み改姓。その後川崎に居を構える。②北条早雲の相模進出に呼応し、北条対扇谷上杉抗争における永正7年(1510)権現山の戦い(神奈川)で北条が敗れたものの間宮信冬は単騎突撃で勇猛を馳せる。合戦後、信冬は海運の要、杉田に移る。

◆間宮林蔵蝦夷探検時代 寛政11年(1799)～文政5年(1822)

⑤文化5年(1808)第1回 樺太調査命ぜられる。松田伝十郎とラッカ岬まで行き稚内へ帰る。再度願出て樺太へ越年。

⑥翌文化6年ナニヤーに到り、間宮海峡発見。土地の酋長と大陸へ渡り、アムール川下流の町デレンで清国役人と会見。

⑦文化7年(1810)稚内で北蝦夷島地図作成。

⑧文化8年(1811)江戸に戻り、幕府に紀行提出。松前奉行の配下に。忠敬から緯度測定法学ぶ。蝦夷へ。

⑨翌年松前獄舎のゴローニン訪問。蝦夷の測量を続ける。林蔵の蝦夷全図は伊能忠敬の採用。文政元年(1818)江戸で忠敬の死に会す。以後蝦夷地内部の測量を文政5年まで(43歳)。

⑤越年 真岡 大白 留多加

③享和3年(1803)職復帰。東蝦夷・南千島の測量従事。

④文化3年(1806)択捉島で沿岸測量。新道開発従事。翌年ロシア軍の日本会所シヤナ襲撃に遭遇

カムチャッカ  
千島列島

- ①寛政11年(1799)20歳で初めて蝦夷へ渡る
- ②寛政12年(1800)に函館で伊能忠敬と子弟関係。普請役雇になる。2年後病で職を辞す。

◆間宮林蔵隠密時代

文政5年(1822)～天保15年(1844)

①文政5年(1822)江戸に帰り、幕府普請役に就く。

②文政7年(1824)異国船渡来の内偵のため、東北の海岸を巡視。

③文政9年(1826)最上徳内とシーボルトを訪ねる。

④文政11年(1828)勘定奉行村垣定行配下に。シーボルトから小包を開封せず勘定奉行に提出。シーボルト事件発覚。

⑩林蔵の墓  
江東区深川本立院  
間宮林蔵燕崇の墓、徳川斉昭が撰して贈る

⑤隠密として長崎へ。  
\*天保3年(1832)シーボルトが著書「日本」に日本地図を収め「間宮海峡」を世界に紹介。

⑥天保4年(1833)天保の飢饉による凶作に、「田地の転作を停止するよう」勘定奉行に建議。

⑦天保5年(1834)55歳。この頃水戸家へ出入りする。

⑧天保7年(1836)隠密として岩見国浜田での密貿易事件を摘発。証拠を掴む。

⑨天保9年(1838)江戸で病の床につく。

⑩天保15年(1844)65歳江戸で病死。



現在もとうとうと流れる小貝川。林蔵の生家は川向こうの集落にある



鬼怒川と小貝川の分離点に設けられた岡堰に立つ林蔵像



間宮林蔵記念館の側にある林蔵の生家